

# けがで転身 光星マネジャー平山さん(青森出身)

# 葛藤越え 夢の甲子園

本県代表として夏の甲子園大会に出場する八学光星硬式野球部の3年・平山颯人さん(青森市出身、沖館中出)は、唯一の男子マネジャーとしてナインを支えている。甲子園を夢見て強豪の門をたたいたが、入部直後にけがをし長期離脱を余儀なくされた。退部を申し出たこともあったが、今は裏方としてナインに帯同している。葛藤を乗り越え、たどり着いた聖地を前に思う。「あのときやめないでよかった」

(高松拓輝) 【13面参照】



マネジャーとして光星ナインを支える平山さん(9日、大阪府豊中市)

## 「やめないでよかった」

高校1年の春。グッツシユの練習中、股関節付近に痛みが走った。診断結果は疲労骨折と筋肉の損傷。完治までは約1年との診断を受けた。入部してわずか3週間だった。

リハビリ期間中は「本当に治るのか」と焦りばかりが募った。けがから1年が過ぎても痛みが残り、本格的な練習はできなかった。気が付けば仲間との間には大きな実力差がついていた。

野球部に居続ける理由が分からなくなり、食事や喉を通らなくなった。両親から届く励ましのメッセージにも返す言葉が見つからなかった。

「やめたいです」。2年夏寮で小濱巧聖コーチに退部の意思を打ち明けると、「ここでやめたら絶対に後悔する」と慰められた。毎晩の

ように相談に乗ってもらった中でマネジャーへの転身を提案された。後悔しないように今できることをやれ。「一番に応援してくれた祖父からの言葉も背中を押し、裏方に徹することを決断した。2年生の秋だった。練習の補助はもちろんだ。偵察のため他校の試合を動画で撮影したり、データ収

集や分析も担う。ミーティングでは警戒すべき選手の癖や対応策を伝える。今や光星に欠かせない頭脳の一つだ。仲井宗基監督も「チームのために率先してサポートしてくれている」と信頼を置く。

9日、大阪府豊中市で行われた練習には、ピッチングマシンの球出しなどに奔走する平山さんの姿があった。選手への思いが完全に断ち切れたわけではない。それでも「仲間の活躍が素直につれたい」。

明石商(西兵庫)との初戦が11日に迫る。「精いっぱい、選手に届くよう声を振り絞って応援する」。自分のやるべきことは分かっている。

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです